

蕉風無格辨

蕉風無格論之卷  
今日記の卷  
花

中村俊定文庫

文庫 18

908

2







蕉風と無格をうり蕉室の流儀  
 是の人のうりか  
 格をうり格をんやをれ流子  
 一毎格の全解をいさ  
 格を自格の格をうり  
 一



安田良齋









そまのたてふ年七月

照骨の減

〇二

蕉風無格論

栞溪舎松花者

一予問く曰く神釋戀地名々表ふのみ春秋三句夏冬二句戀二句やけつむる格をわたり枯野果ふ無格やうけつハ非なるも蘇室答是ハ季寄をとりやふやう々々本集をとりけむたむ時よりの誤かり季寄よりの誠をばたう争はれう々々以季寄を捨本集を見たりとるる金蘭集



神 三つれおろし二つみの注連の年時

三つみまき張りし法幸あふけ

釋 三つれおろしをよむはた教下師

三つれおろしをよむはた教下師

三つれおろしをよむはた教下師

戀 三つれおろしの掃うふ掃うふ

三つれおろしの掃うふ掃うふ

地名 三つれおろしの掃うふ掃うふ

三つれおろしの掃うふ掃うふ

春考 五人扶持とて志たてて扶之那

りおろしとて志たてて扶之那

おろしとて志たてて扶之那

おろしとて志たてて扶之那

おろしとて志たてて扶之那

おろしとて志たてて扶之那

おろしとて志たてて扶之那

おろしとて志たてて扶之那

秋  
四句



藤をうづめたる露の面よめてはるん

理をばなれたる秋の夕ぐせ

夏

のきき袴ふうけりあう乳

杜母のをねまあまそ度産

こころおもひをいそぐぬかりは

冬

猿みのにほれたる雪の松をけ

ゆらぎをくねやあかちか子界

水うづめたはれ中よるをみらありく

秋外くはくあまぬるまき季はくま例有

花小雨風とあはれは戀の事ハ芭蕉談ふ

一句ゆきも捨るやいそは事あはれ故今も一句

ゆき捨たりも多々好む畧に如日神の處地名の

處を句と例ゆきうたへ答ひけり故や曰

や句いたせ句ゆきもととら有物故也答聞え

うたへを句と連句の始めゆ置發端故発句

や申付るけり句ゆきもようへむと今元

句もゆきを好む人多く連句に不知く俳諧

を志したるやあり人多く好む發句と連句



や別々み見を以故此事出く侍りのなまらん連句  
を不知りもの俳諧を好むらひうたへて葎句  
又表六句の外を以元禄のころら三五人集ひ  
よましく黙坐澄心の如く短繁を照し葎句より  
つひ初たる模様見え侍る又仕舞ゆれば蕎麦を  
やの馳走も見え侍るつひつひも樂しき事  
おしひやゆめたはひ富家の人たるも此道お  
遊ふ時を隠逸の人をおしひやりわひも事と  
樂しき事人の此道の主意を以ありき事

侍るを以日猫の戀三味線杯を戀とらひひこ  
うらな答今の俳諧を戀を以ひく又志離れと  
く木や竹とけを以合せたる如きのも見え侍る  
元禄の頃の戀うらなも重くも附く侍れと始終  
のささ心志成りしうらなも夫戀とら情のこ  
る事やう 本朝風雅心の情躰第一の大切なる故  
一卷中是を以てうらなひうたへて故に俳諧の情なり  
山水幽静の樂しき推りしよ遊遊を以て實也  
其樂しきものうらなも戀の情を以て和むる事あり



そ及是を情實ひとけやうのひく一巻の中尺時も  
むねのこころをうぬ也五倫の道知らき志たしむ  
も戀の情をけりのを歌道も女色の事やのみ  
ちかたるゆゑ連歌もこのめえんらの見ゆるを  
歎き

敷ゆらぐむき奉るふあゝひやう蕉翁一派の野  
風戀の一句あゝも捨く始終も戀の情をたやひ  
花鳥の戲と旅のやけとあゝる風情をたやひ  
見る事きく事ふりのあゝれさるやう一人

交うらうらやも親しみく是を連句の上ふ  
敷くゆらおひとや其姿の幽閑たる是を  
ゆひ志をうらやも又竹村を隔てて琴聲を聴く  
くく薄月の夜梅のやうとちくやをる如く  
やうゆよき味ひ也俳諧隠逸をる人格式を  
たぐゆらやうゆひの猫の戀三味線をるの趣も  
何くゆ床も所有ふあゝゆや  
其外當世の格うらふあゝぬとさく  
あゝゆらうらやうめ、香の巻



物もさう〜尾の持痛を思ふ人多し

詞も無常あり〜そ〜ろふ無常あり

〜ゆ〜おゆ〜壬生の念佛

詞も無常あり〜心も無常あり

四季部類も詞の格を定めたる〜ゆ〜終〜  
格をたはしむるの自在なり故も無格なり  
わ〜〜此無格をたはし格もも〜自然の格  
もたはし〜自然の格ハ天格あり〜自己の定む  
る格もあり〜これハ卷毎も同一〜ゆ〜以蕉談も

本末曰翁古式を用ひ〜をたはみたる〜一時ハ敗  
〜たる〜ゆ〜翁曰花定坐あり〜十一句目ハの  
は〜花出〜ゆ〜是を以〜あり〜を公羽  
以前ハ死格あり〜ゆ〜のを其死格を破り  
て自然の格あり〜ゆ〜は〜  
〜ゆ〜詩の聯珠詩格あり〜詞の玉の緒は  
自然ハゆ〜を拾ひ〜たる〜蕉門の  
無格ハゆ〜人の死格を自然あり〜たる〜の  
あり〜侍もハ必格のあり〜を立〜ゆ〜



去嫌等の事更ふたきことなり侍り見たり  
々れいたしむ六句八句もあはれも去はる見  
る

心格より事ある第一の病はさへ心格と  
表の静く裏より次第ふ動はるる  
うくの如くことふたれ置は心地虚か  
〜轉〜變ふ應はる無格の周流是を俳諧  
ともいふ金蘭集のうふ味はたふる

とけ年ふ女房の親子ふれり

まじりの法もさすぬ人

法下の湯浴をおくは茶はら

湯はさあはるるままはら

是ハ名残の表ゆく春四句たる花々名残の裏  
五句目を定格や〜春季三句や定む俳諧  
律なり

むらさきをうらひやふあをさぬ

是ハ戀一句也二句ふ定むら非也志はれも二句  
も三句も有る〜皆機ふのうらひの變なり



隣へも志くさけ姫まつれも  
屏風のうけふりぬるこころ

是ハあけ句や戀二句をなす

木のやの巻

みみいほやのちりゆかき  
うけりのこもさうさうさう  
くものりいさうさうさう

是ハ戀三句也

空豆の巻

いもろやまよひさうさう  
ふやんまはさうのあま  
さめりやまをけけはるさう

是ハ戀一句は一卷ふ三とら出

うらさうの巻

瓢箪の大きはみ名をうらさう

先ふ此表四句とて此らをもつれさはる季寄  
ふ青瓢箪々秋や〜瓢箪ハ雜と志くは格ふ  
くくられたる人此句を秋と見はる事とせ



也此表秋五句也

うたひらたりおく冷く照のま  
初一糸を船のこきし  
あまの結くおゆの機をま  
夜市うしやのたふ年月

是ハ秋四句也

五人扶持とく志たて柳の非  
りうりくくくくくくくくく  
様ひまは月をららら山越く

二見貝歳且之部猿曳

紀事曰京都舞猿者六人和倍祖公曰猿舞献  
赤繩於高貴家この猿曳くはふあくくはら  
翁の句ふはく曳ら猿の小袖を礎うれ此猿曳  
のうたふあくくく人猶可考た月をらら  
あやいなる詞ふ春季のこりねるをとおゆ  
後世月をはくいなを秋や心得侍り此句春を  
るくくくくく所を志るくくくの付初るく  
くく



そとつゝまうひを維子の勢ひ  
あつゝうゝ華をあらぬ少壯心

是ハ春五句也

廿五のあやしくけりけりけりけり  
五路らまゝにや道の極先  
うゝひ及びけりけりけりけり

是ハ夏三句也

志くけりけりけりけりけり  
火性のはまのこゝろをけりけり

まはれぬよそけりけりけりけり  
あはれぬよそけりけりけりけり  
けりけりけりけりけりけりけり  
けりけりけりけりけりけりけり

四季部類詞今小釋教也無常とまゝとる大  
ちる誤也釋氏の教ちる故小釋教中のみま  
釋門やも申也其教の第一を無常とる無  
常とらあつたふ紅顔とるもゆるる白骨  
や人生のちるけりけりけりけり其ちる



人生の一刻一刻ふ減るるを志しけり鐘あり  
無常第一の用なり故に寺々小鐘をおき侍り侍  
りる部類小非無常詞やいふら小鐘を入るる  
うらなはしき書の人此重寶やちや一夏の  
蒼虬老師常小此書をいふららの重寶とせられ  
しよるをさしまるる其庵室の甚くはを  
畧に其畧も志しけり是を格やく心得侍ら  
りける無轍の境ふ入るるを得むや此表の五句  
目六句目を見たりへの釋や戀を禁せり

秋をく早瓜辛きを曲を系う那  
よの居ふ事なく戸をさしけり月  
子編み糸をさしけり仕平への用も那  
人もさしけりよれこの教下師  
猿柳も池にけりゆり田舎旅  
教下師は禪家の類也ひらの念慮をばあし  
さしけり放下師やいふちを謡曲にけり放下僧  
やいふ其問答みれ禪語にけり釋の部を  
らけりよりのやけりむり謡曲を俳諧の源氏



やうひーちるる今と謡曲拾葉抄中の書  
俳諧ふ益あつちる

数句春秋三句五句目必夏冬の二句を定格と  
して非ちると此五句目雜也

海~~~~や落葉のころれる草

侍士のチ新~~~~を侍を侍

海~~~~の志~~~~

表ふ神を禁せん

本賦対志~~~~を葉を~~~~

於るまふまをとや侍をあはれお  
志るうぬお幣ころむ日月を海  
ひ~~~~お持をす~~~~

右第三より六句目迄たり考へた~~~~  
初宣の~~~~の布ふりぬ  
あはれ~~~~のま古を~~~~

右第三四句目也

志~~~~の~~~~  
笠あ~~~~



右護句脇也

紫陽花の巻

うんくや青の空をこぼれし  
楳嶺うけくさくさくある  
さみ愛くは持たれぬ破れも  
やうくやたれは流風のおや  
るまよお織ぬるきくうら花  
らおはき顔の身たけみまき  
あひもゆるうやうらのまはら

山のうはあふ志も年たか  
くたらしのほくくは旅のまじり  
四らのまきまきこほりまき

是ハ五句目よる書とるる

月よる月まきく小夏冬の季を一句入る紙  
格やたれ事たり

四日の月やうく句秋を事心を入る見る  
るく三日月も過四日あもまき月影の細  
きやうく名月まき心や侍る古人の骨



折みれり事よる見るる

無格を得る格ハ自然の格無格を得る  
ハ格を死格やい事ころ静ふ自得の格  
る

一問俳諧のうと越轉しうと答ひまこれ故ふ  
定り侍らぬ心空しうとされハ附肌新を  
常ふころを虚ふは俳子第一のた  
み也必識見をいやむとよく志ぬ蕉風  
の要めを志はる是を身ふ行ふを俳諧の

人やうる虚心を宗匠たる

一問情實のひと終たる事ハうと答ふ戀の情の  
いたる花を風雅心をまの強き根也  
花實同根たる儒の明德佛の見性見  
うは時ハころ輕々やころの也故  
中庸の結末ふ無声無嗅やうと

皇朝萬葉のひとふとるやうと  
同く飄々といふも無欲の躰ふとる導き  
ちるる



一問正風傳をよくもいそぐ〜今こゝふ竹村を  
隔はる琴声薄月の夜の梅の香をよめた  
まうとつゝも答うれ野集少も此一ヶ条  
筆を入さるれちる是こそ誠ふ蕉翁の詞を  
北枝の闇記せらりのを見え〜傳中のヶ條  
の中もふ立ち詞も和らふめ〜た〜且  
北枝の書翰少も此條を見え侍る其余を格  
太嫌をり〜け〜蕉風を俗ふ導く後人の  
志〜ゆ〜北枝の蔦實を〜をふ

〜き所作たる〜

一問句走る答歌人の申詞少く侍る歌の詞の  
志〜るをよひ〜やせふ故ふ句走る〜い〜  
〜ゆ〜せる事也蕉門の野風ら情實い〜ら  
ち〜を樂〜み身ふ行〜俳諧の人や〜  
風雅心を昔やせる故詞の志〜るを〜  
事を非はれ〜れやも自然の勢ひ〜

〜や〜

〜







辛峰のねを花より 続〜  
志を〜く〜花の上の月を

是皆言外の妙味

総論

俳諧隠逸の道を以て蕉翁生涯羈旅の料と  
を以て非やりのなきなり 答隠逸を減欲の道と  
祖師道の為ふを以後世への為の為ふを以  
儒佛の業みれ〜は如くなりゆく心むと

六

を得ゆるを

問戀を〜女色の事を〜情のいたりと  
〜情の〜無理あり  
とや答

おほせを〜奉〜歌集不義を擧て  
〜情の〜  
〜の萬葉集から親子兄弟朋友の〜  
よみたま〜今道理開け侍る萬は〜  
〜



問風雅心や虚心やいつふたうなるや答心はめと  
寂然不動是を虚心といふ物欲ふ動く故これと  
養ふふ風雅を以て詩の三百篇思無邪の道  
皇國の歌道みれおのほく道俳諧も其杖葉  
の道ゆゝゝゝ虚心を養ふ也風雅心や虚心とふ  
たうあゝゝ 問翁を風雅心やゝゝゝ虚心是宗匠  
やゝゝゝ翁の宗匠ふ非とあや答釋門虚心を仏と  
いひ儒道の虚靈を聖人やゝゝ此道虚心を名人や  
ゝゝ也風雅心や虚心やいつたはつて前ふゝゝ

問情を花やれゝ心を實とれ及其根源をいゝ  
答儒釋の道やれゝ有無のやゝゝゝ無可解や  
ゝゝゝ此道の妙用の俳諧を忘れゝ俳諧は遊ふ  
事を味ひたゝゝゝ

問俳諧の連句畢竟もゝ遊ひのちれ格去嫌  
ありやもゆゝゝゝさうりやもを味まゝゝ何  
故ふゝゝゝ格去嫌をきゝゝゝや答ふ無格  
の蕉門の俗ふ落入らぬ道き也ゝゝゝ格去嫌  
を立ゝ遊ふゝゝ誰ゝれをゝゝや蕉風の名



うらたき事かろけり

慶應元年七月

俤と雜越たる語を和  
ちのまゝ新轉に細詞なり  
和とていふのを我たるを  
中一法實の聲かき  
いおとすはたき細詞の  
いおとすはたき細詞の



たつらあ

あはれ

あはれ

あはれ

蘇子... 流中... 此... 流... 蘇子... 流中... 此... 流... 蘇子... 流中... 此... 流... 蘇子... 流中... 此... 流...



少持を於海舟に二杯の酒を以て  
杯酒の事ありてやいかに  
く下ゆれば手にあひては  
と及酒の事ありては  
酒の事ありては  
子酒を以て  
午酒の事ありては  
少酒の事ありては  
意の事ありては

あはれやの事ありては  
自ら説く事ありては  
よき事ありては  
あはれやの事ありては  
あはれやの事ありては  
あはれやの事ありては  
あはれやの事ありては  
あはれやの事ありては  
あはれやの事ありては  
あはれやの事ありては



此の巻の要は、  
ととめは、  
を、  
利、  
と、  
ま、  
一、

と

と

蕉風日記

- 一正風傳小格ふ入く格を出く自在小遊ふ云
- 一卷のころ格をたゆるもの月花第一也
- その月花は座を定め自然ふまうはと
- 入やう格を—出るやう格を—
- 一秋の句ふ春の照はけたるもく
- いさやを問の—
- 俳諧—
- 一蕉風談ふ崩きたきまふく



やうし問答今ひやまきはこまうふやまを聞  
せよやうし人ふこたふ

有と同時は無や答へまへる無と同時の有や  
答へ侍ののみ無格をたれ又問夫や  
半日の閑を〜〜〜

一十月七日 叢起

霜信豊鐘肅

木の葉あはるやらや蒼天。

南圃

包教

△三

暮鳥鳴雲際

毎々

午雞報路邊。

春日

圓の月を鏡へて急ぐ

昌徹

危棧繞谿懸。

東洋

念たむは流石は月を

尚郭

わら枝ふあゝをわの河

知誼

蕉翁素堂漢和の歌仙隔韻無格を

蘇室俳諧おき書

一風雅心を得るる山水幽静の地ふあゝを



第一とあるは名利のほろふなり

一俳諧の巻をとりて事甚このまは明道先生  
の仰せし体なり經學念書はへ好著すれ  
志をくくちりて中絶を況んや俳諧の巻は好  
著はれりや

慶應二年春

一蕉風無格小一卷小二三ヶ所程はある奇新と  
いふ事と云ひ人小答へていふ秋三句杯  
格あり所却て格なりたる所のほろふ

天の能くあれをうたふなり

一蕉風談崩とあるはふら霜のま  
やいふことなりふ月花を月花の座おかく  
とちりぬやふいひくまはるる定まぬ  
格なりや何の事や答好みくく上  
を人作小落る故なりと翁曰十一句めおのつ  
花ふちりぬや又曰花定坐なりやぬりゆや  
りたるなり

一無格を志ぬる格へ自然の格なり去嫌杯



も自然の格なるなりや吾去嫌ハ人作の甚  
しきものたるなり無格の格ハたや  
四季のうけらるるもふよるも早うよるも寒  
きやあれを寒体は随ひく綿入も暑き  
るも秋ふちるも永く暑くはひのけ  
ても惟子をきくたるも天の流行ふ  
たるも人間のちるも天の流行ふ  
天の流行をなしたる事のたるもやそれ  
無格ハ天也無格の格ハ天の流行ふたるも

ひやのたるも無理のたるも  
事を歌仙のうへふもたるも  
一其角曰蕉翁山家集を見ひも風雅  
得たもふ見ひもたもや  
答西行頼朝のおもふ於て曰我うたは  
よるもひ出るも此詞の  
山家集ハ格ふも所を蕉翁山家集  
を得たも其無格の心理をひも給  
ひたるも翁の句ふ



やどしうもたうやまのうけ屋敷

あゝ人のうたふ

ゆゝ舟のちあつはるんよとあ

あゝもたねもの水おきつせ

きつてはよとひたつてみよたつて

ころやま事をころきせ

みれ無格をへ

一聯句嘲僧

東坡與子由佛印同飲於水閣偶見一婦

△六

人洗衣脚白東坡曰玉筋挿銀河佛印云

紅裙照碧波子由大笑詠後二句云再行

三五歩浸入老僧窠

一あゝ宗匠のいそく俳諧三昧お入くを修行

地中申るはあふ明道のきくをきく

俳諧の巻をたひ事を好きひやひひた

山野おあを是とあ事ひあひ

ふ吞ふ根なき時ハ三昧とお人も執着れ

ねる日根といふ吞ふ性情おと



本心を得る根や此根本ふいたるため  
小巻をたけし無格の人の三昧も修行  
地ふくようくうはな

一一巻の俳諧の形をとりやそや答ふ一ふ  
るをとりや以日一やわりの答ふもびくを  
らぬ事をたへる三吟の巻ひやう  
志たうやふ高底順ふ志たうい調詞和平を  
るをとりういけの微氣あり高底順を  
調詞和平を隔心生一一巻くたる性情

△七

悠々や謙を守り安きふ志たういく和  
たう時の調詞一をたけたる

一連句のく雅俗のみまけういふ答ふ自然  
ふ志たうを無欲や一一雅也格をたれを  
隔心生一一俗ふ落入このまらう見たまへ  
一一雅俗を見まけ侍る

一蕉翁のとりのかの所の連句も俗事む多  
志たうも古人く高く隠逸道心のふ  
あそび俗事を外う見く附句をたなる







蕉翁の天格有やみ好まきこちうーや  
みまきまき有る終ふはるたは舟の如く  
是を風雅の全躰や云

一天格を人つるは〜おのほろは〜まき  
ちう人格ハ我小定免を我ふ〜むり也  
無格を人格をのとき去る天格ふ〜道  
一少〜もあ〜た〜俳子の病は〜  
無々有々定免を〜面白き〜

一心地虚無〜格を縦横小遣ふ〜蕉翁

△九

ち〜處誠小俳諧小あ〜心地死  
格小役せ〜我影小驚〜今人のち  
所を〜

一元禄七甲戌年

ひ〜あ〜峰翁  
ま〜あ〜のあさ安世

この巻も月よ付  
表五句目

裏十句目  
月の香礫の抄子の侍てある土龍  
月花を乳れ〜



名表七句目

明月の餅子あてたる園を早苗葉文

名裏三句目

坂のソバあまのこちひる月翁

うく無格ふ月まよはもいぬぬ太嫌の

ちれをこしきりのあこころをるる月と

清くもちかくもさむい

うらよるく花入揚進くめ松翁

ふりこむしをたを清きまの若彫堂

これ巻よち

裏三句目

あつふ葉幾ふくまを花銀杏

同十二句目

葉や葉とに遠ゆくはく夜彫堂

名表四句目

移むりうはの舎敷のちゆみ普子

名裏四句目

花の名ゆくくちまの揚貴妃彫堂

同五句目

清きけはれ中くさるる花の色黄山

花らき句ら揚貴妃の一句くち田原えぬ

詞格宗匠曰葎句ふ花入中りふ字あらゆ名

あつるる一答

本流りふ汁も能もゆくくこれ翁

あつるるふふりて葉をちり 琢碩







編みきく桂きくあふ 叮端  
田原う体体うきまはあふふ桐葉  
あや法まうくやまお位ちれを字はく  
あまら体も妙解きまう四句目とくまう  
あざめらう本法ちうけ

きふお船白ゆきり休け子浪化  
體考うけらくまの體き本來  
まら父入のみゆけいをふ橋へく全  
まこと時れまきわらうちうを浪化

起兼轉合も無法とちり甚しき

遊をくまへもまや候の以治圃  
約束の小きひけけまき馬寛  
十里まうりのまへ出う孝里圃  
煤をくまへその句々歳暮の句を体ふ秋  
の題たる小鳥を附くしうもその秋一句  
あくまうく十里まうくまや雜を法け侍体  
そのうへ芭蕉談く聯歌の祖師たる  
貞徳公翁をきくひく曰宗因ち此みらる



ひしやちり宗因たしきもあはれも貞徳り  
よだれ張ぬづるる云云

まはもたはしきも誇きく海を野水

此巻の六句目や

極系をたを味貞徳の富正平

うしひし嘲り不法のもはあはれや  
蕉翁と無名のりれたり君のりたも  
たくれ日無名やわつり答ふ師もた又  
弟子もたわつたおれはほちを味友と

よらあひしちたをまの俳諧たり  
たふ隠逸道心の樂しみまはれり  
を知らたししるし聯歌や急度たる  
家りしあらんたれや蕉風もはれ  
たれおれそ家のやちどらあはれ  
あり後世やれり無学無術のえせ  
やもうた聯歌の格法をいそふや  
寄よせふたれは蕉風や唱へる事  
やも蕉風りあはれり格ふあたる事



實をゆゑに見るはゆゑなるをこゝろの人は  
も侍所作よりぬや上田秋成大人の  
せりの語てよ書をみれば此里をこゝろ  
ちや俳諧師や宿をこゝろぬやのこゝろ  
見え侍を蕉翁の隠逸道心と今やたゞ  
~~~~~

貞徳守武宗因をよの道に聖人  
をよみ然る句

月夜のこゝろやまゝにれあゝ

やら句あはれをいれもみれみれまて不敬  
のふはまひもあゝざらや答ふ

ほのこゝろあゝの海の船きりふ

いさゝくれゆゑにそまらふ

やらのうたを人麻呂明神の詠詩なるや

つるねや萬葉集やなく家集やなく

その頃能調子やあゝぬとこ人ふ

きく侍りぬ

これ枝ふゝのよまうらゝの香芭蕉



此句...たるひるをささくおれ芭蕉  
 ちと...句を月花の...好や...調子あそぬ  
 やうふおれ...詩聯歌の事...れ...  
 侍と...も聯歌...戀の句二句已上五句  
 やは...まは

教旨...  
 歌...  
 芭蕉...の如く無格を...  
 と隱逸道心無欲を樂しむる本躰...

俳句...の余真...  
 逸道心の...無欲...  
 ...鏡の...  
 ...明鏡の...  
 格太嫌詞格心格...  
 小明鏡の塵ほ...  
 侍...道心者...蕉翁のみ...  
 東坡佛印西行み...格を...  
 ...何故ふ蕉風二十五ヶ条...物



あはれや答ふ

名月北條氏御代五十一ヶ条芭蕉

これ北條氏の御代五十一ヶ条の式目  
あはれ事あはれしその式もくおほく  
人のつたみ侍もやとれを嘲く句や  
兼てぬ道心と聖人のみちをり堯舜の無  
窮もこれとわかれたまふ故天下を治めん  
あはれや道心を志たむく生涯無所住の人  
くく二十五ヶ条あはれむ後世蕉翁の名残

あはれりの志と心をあはれく明らうを  
答ふ曰蕉風の俳諧たる本道やゆつた  
あはれ答ふ無窮をくくの外をあはれく曰  
あはれ子夏もや答ふ先分や安くむの詞の  
あはれを詞のくくをくくくく

あはれ枝ふくあはれもくく秋の香芭蕉  
あはれくくや答のありく故やの介士朗  
あはれあはれのりくを除きくく句あはれ  
あはれあはれくくくくく入あはれくく



さよふ落るるをねるる——さくく詞をこころやう  
ふあ——ぬうたら風調よろ——情をま  
らみく口ふたをうら

静さやらのそらふ花の音 樗良  
山ゆやゆ——さふよふれのみ 蒼虬  
やり——おほく——夏——侍色さも口  
たま——ぬら——清——くぬのや  
ら舌ふまゆぬやふおとこれ侍を月の  
影さゆや軒端をやうら——やら志——

さゆら——

あれきひや志これある故の澄夢 其角  
これきひやうら——

な付——やき良の橋のうら志これ 曾良  
くら伊賀の場ふ入——やうら志これやう  
奈良やうら——あ——

うら——津田北里やうら——色 羽江  
都く名所の字ハ——あけ所歎ま  
あ——侍名を——うら志——た——



實はあたるやも風雅なる名はうらみは竹  
田やうらみ淋しくも里やうらみやうらみの  
ちかき屋一里まやうらみをこふわやうら  
うらみ

柳をよもうりきよは月芭蕉

明石夜泊の句を何をもつてやうらみ  
ゆらふ聞えぬふ似た色も情は何と  
うらみ侍を萬葉集の長うらみ野の山  
と時をくや雨をうらみうらみ雪を

うらみをうらみうらみ如くうらみ風雅を理  
まはるうらみうらみを無窮をうらみ  
うらみ何故うらみうらみを名利のうらみ  
うらみうらみ人を見はるうらみうらみ  
うらみうらみうらみうらみ

うらみうらみのうらみうらみうらみ芭蕉

是も朧也やうらみをうらみ聞えぬうらみ  
うらみうらみうらみ眼前の風情をうらみ  
うらみうらみうらみうらみ妙味をうらみ



まゝく〜雉子みちき〜野坡  
一句うへよる志たへよ〜ひらたきと飛流の  
たふらふらださう如〜ひ侍らゆ〜  
こやまをあら〜ひ〜らよ〜  
を雉子とちきた侍りのち〜ひ〜  
風調と理よとよ〜ぬら〜知〜

こられ水雞の〜子清川 芭蕉  
此句旧例をおり人を水雞の色をと〜め  
と〜むみだらふ新を好む俳子の實景

をわきぬ〜椽の〜たよも水雞をち〜せりも  
あ〜ぬ〜これ水雞の新ら〜実景  
あ〜風調も高〜う〜蕉風の俳諧  
と〜

新考〜の〜かき 本末  
この句と安〜のび〜うよ〜ひに  
侍ら〜あ〜の俳子とひや手際あ  
〜〜のゆる  
き人とた〜是をのみ學をんやお〜あ



らむみれおの成うをなほさし〜ぬ  
ゆるなちるこころちたゞ風調をのみいふあり  
な〜

水うみ池の中よりなるありて 支考  
よ〜のび〜うふい〜だ〜たれ句をり  
あ〜ゆ〜も好みこころ侍らさう〜安ら  
ふい〜だま事の出來ぬを句案のうへ  
よ〜も味いたま〜

家掃〜の〜掃ぬ〜啼〜と〜芭蕉

う〜ち〜と〜成〜と〜風調をむぬや  
とのる侍を事の出來ぬりのたれを 蕉翁  
曰歌書りのうたをぬみち初心より上達まで  
見はる〜や〜風調お就〜あ〜と〜淡忘  
とけ〜むたをたれ〜此句〜心の  
人々ちり〜啼〜と〜う〜ふ〜ぬ  
うれをぬやまた拙き人ちてぬめふせむと  
てうへふお〜詞を下へお〜有る〜みれ風  
調のおれげ〜ぬ〜ぬ〜のち〜處



ち侍る

月ふき侍狸の書巻紙をぬき 芭蕉

ちやうど人とも月も侍ややおうはさきさき  
やふおたりやら先月も侍よさつしたる月  
ふき侍やつしたるや風調の侍もさき  
むよ味ふをうたさうふりのゆを  
その調へもやうわろを句と口お  
唱へ味ひ見よくも侍をうら文臺  
あけよむくろやも口中小味ひ侍

らち口ふたさきぬいささちわろ  
忽らふ忘る

ちさささささささささささささ  
ちさささささささささささささ  
人の句作しあはれ侍る  
うらわりのちさささささささ  
ひきよ風調ふささささささ  
のあはれさささささささ  
よささ味ふ



うん〜ゆ〜ららの詞を音声 齒ははきく  
うららゆらゆらゆら〜あ〜まの〜む  
をうほゆ〜りのあるを〜一句の〜へ音声  
齒ははきく〜句を〜〜き  
〜り多〜  
〜り落付く淋〜き〜人の声  
音声の〜はきく〜のた〜り  
〜も静を〜ゆ〜一句の〜へ音声の〜  
ふつき〜句を〜静〜も  
も風調よ〜

た〜はみ〜第〜芭蕉

うた〜も風調も〜悠々たる水  
如き〜蕉風の道と幽玄を〜  
ひねや〜世間俗欲ふ名利をひねり

俳諧の交渉をやみ〜み〜山野  
浅樂〜も〜蕉風の幽玄と樂  
しむ事〜

芭蕉

月影の〜支考

支考の葛は〜原や〜蕉翁は  
浅〜句を〜  
附句は〜心ち  
よ〜書〜侍〜今を見るふ我句〜心ち



樂しきみこころもまじく見え侍の附句  
さねくろくろと樂しきみこころ見えは是と  
風調を味ふさや成しはゆゑあつて  
切れどふみり源氏とよくも見れば  
源氏を志すはきを風雅となきものや  
つれづれささきとの巻朗々朦々あつて  
見きをあはれなきや見ればあつて薄  
月の夜ふらぬの香もさやあつてあはれ  
如く竹むら成隔てて琴声なきこころ

俳諧のひびきたるも雲のく人の戀  
みやけささきささきあはれ深  
らのちねるははくの二句の風調よ  
味ふ時ち心地もあつて切れぬ

ぞたらしは垣のころふ秋の夜 孤屋

詩よ白髪三千丈縁愁似個長不知明鏡裏  
何處得秋霜やいつら白髪の三千丈も長  
あはれささきささき愁の情をささきは風雅  
の常也萬葉集の長しこみりのみ



峯ふ時ちりて我を雨とふるさる隙ちりて雪  
とらふとく侍ちりていなきもいつはも雪雨の降  
りのちりてぬがもかくいひて深山のけりて  
見ゆらちりてなごり古今集ふりてみたる春  
の山をら遠くけりてふもさる侍せりて花の  
香ぞけりても遠山の花の香うけりて侍りの  
ちりてぬがも風雅心の花に多きとありて處  
よりちりてけりて侍ちりて秋風よ深のた  
ちりてけりて侍ちりてぬがもさるいひてさる風

調も高きまうくしてあまれちりてさるみゆ

日のもや一とらる宗匠のいそく蕉翁虚言  
ちりていづれ堀をたきけりちりてさる  
いそく人此事をききけりちりて堀のたきけり  
りのちりてせりてちりて堀のこりてさる  
とらりていそくさるさるさるさる

刻本は安き國の侍ちりて芭蕉

ちりてさる人ちりて露霜をさるへお置けりてなど  
いそくちりて風調のちりて所をさるさるさるぬゆえ  
ちりて

いそく侍ちりて侍ふ軍の大事ちりて芭蕉



ひびきおきやうんを詞俗詞たるをさしれど  
うんをさしきくみあはしきく俳詞やなれど  
俳詞やうんを別の別あはしりなれど  
の風調よりさしきく俳詞とさしきく  
酒くまはたぬあはしきく  
きくきく聞ゆうんを俳詞とさしきく  
風調よりさしきく

うんやみく秋の臨は尾さがり 利牛

きくきく尾はつらき俳詞をさしきく

きくきく秋の臨は尾さがり 野坡

きくきく及秋の志さしきく出り利牛

通例の句はさしきく雅詞もあはれど  
さしきく風調俳詞をさしきくこの味はさしきく  
俗談志たさしきく蕉風やさしきく侍る何  
の俳諧あはしきく蕉風の俳諧やさしきく  
句より仕舞さしきく風調のさしきくみれ俳  
諧やさしきく蕉風さしきく俚言は



とむびくや鄙下をさゆらうたふ對をゆの  
詞ありゆふ俗事浅きゆふありば一卷皆  
俳詞をゆらゆらと深く味み登り風調是  
よると来ぬ

我田へ水をひくや俳諧大宗匠の日俳諧  
の詞をゆら世間みれ通ぶる門人これ  
しるすゆらゆら人曰蕉翁以前の人ゆら  
不言をゆら否や大笑々々

物ありゆら身ふら此吟をせゆらゆら芭蕉  
くくやゆら俳諧中ふまゆらあゆら  
と風調のちゆらゆら蕉門の俳諧ハ

上臈のあそびたまふ中ゆらゆらたぬ人も  
ゆらまゆらゆらゆらゆらゆらゆら  
ゆら俳諧も俳詞もゆらゆら歌ふ  
ゆらのあそびを俳諧のゆらゆらゆら  
ゆらちる俗事ゆらあゆらゆらゆら  
ゆらゆら俳諧ゆらゆらゆらゆら  
ゆらあゆらゆらのゆらゆらゆら  
ゆらゆらゆら維子ゆらゆらゆら  
ゆらゆら啼たゆらゆら俳詞ゆらゆら



俳諧よりしきも雅詞も俳詞やちし俗詞  
も俳詞やちし心はしし

まゝ並り侍を若のり遊にを付し

しきみはたふふあがれあひのま

ひねむたしはまあやはきの分別をよほそ

あやとるあはぬあだしころちをほそ

見え侍を侍しし俳詞やししあをたれども

ころりましし兼用をあし及所を

まゝれししはししやせし月のま

教裁を好まあきしはし

ぼししししししし俳詞ちしし教裁やしし

あし俳詞やちしししししししし俗詞か

子か

しししししししししししししし

娘をさうたふしししししししし

下人の痴情はしししししししししししし

あしあししししししししししししし

あしあししししししししししししし



歌けたる味増さるにや体向何ぞ

先の二句は「さくらさくらあはれ体たはるさくら」  
品よくいひおくるさくら此味増の句をいふるさくら  
をいふみまはるさくらいへ味増やいふさくら  
浅うくさくらをさ離と侍るこれを酒や  
いへるさくらさくら

や豆花吹雪うさままみみ源

此一句何の俳諧もたきさや多れども俳諧を  
事明くめると一句のさくらうたふれさくら

俳諧をゆくめれ余情あまるさあはるさくら

豆の如きのはけい海川

上張をよめはねほごのさくら

さくらさくらさくらさくら

風調のさくらさくら一句さくらさくら如くさくら  
次へおはるさくらさくらさくらさくらさくらさくら  
さくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくら



きり〜ん 新の下より鳴り出〜

みれ〜ん 浅き心ま〜 俳諧の情品よ  
所〜れ〜ん 心〜ん

鳴りの仕事一のエスき侍を程

や〜ん 故ふ此一句を〜 淋〜ん さま  
侍る俗理兼心〜ん 中〜ん けけたる句々  
の〜ん 此一句い〜ん 味ひを事  
た〜ん

い〜ん 浅き心ま〜

信都のりや〜ん 侍を事

一の侍を〜ん 浅き心ま〜

あ〜ん 浅き心ま〜

い〜ん 浅き心ま〜

あ〜ん

あ〜ん 浅き心ま〜

あ〜ん 浅き心ま〜

あ〜ん 浅き心ま〜

〜聞へ侍る 葉の買置まけ〜 賣出ぬ〜



つる体一句をききし〜ぬり中〜き人〜お  
侍れがゆ〜〜の三字ゆ〜〜  
かほ侍をき〜〜のちた〜ぬ故おはせし  
くを〜〜風情あ〜〜此三字ゆ〜俳  
諧寂莫の情をあ〜〜何の〜も  
あ〜見過〜侍を俗やよ〜侍〜

は〜〜花の勢を〜  
〜抑を〜〜  
〜あや吹〜〜

ちや〜みれ淋〜きちや〜故お隠逸道心志づ〜  
〜離〜俳諧を〜たき〜  
ひゆ〜〜如き句や〜も此心よ〜出〜  
おのほ〜〜みあ〜〜  
うね〜〜俳句おのほ〜〜多く出る巻  
と〜〜見ゆるりのあ〜侍を

蕉翁曰我口まぬま〜事ち〜

〜〜

ち〜事と其〜の人々〜みれ氣品の



高きのみならず蕉翁の師を志たまひて  
季吟法印トつゞけ友なる文章素堂あは  
蕉翁やとも耻すのころもやうまはちや  
故ふ如来の行處ゆるげの教へをとり  
真栗瓜のほ句をあはちやいふも今師を  
きの後やちやとくはふ俗々きわこじ  
ころりく古人のまはをよく見びく  
と勝心のみ日々ふのげを人まきく口さ  
わちた心時々刺々ふ盛むふく勝劣胸と

く教へ先甲乙ふ欲をやく俳諧とやゆ  
ちむくくく蕉風の本意をくくか謙  
まはのころりほるむく此道あはち故  
却く人々をよまふ事や出来なん嗚呼

人の態をり事たる終

あはちの長きく事たる也

これいふを口はれをく秋の風

うは教あは蕉翁の道くくいふもま  
蘓室より蕉門の罪人をゆるす



慶應二年晩春

蘓室久安誌

修行地

一蕉風たゞれも無格他風たゞれも有格たゞり

他風や交渉せしめ

蕉翁曰他門と交るるもくわくわくしうしうはくた  
心蕉風よ入く却く他門を和する程の人々  
さる事もあらん他を和するの心をやめて息  
樂むる也

一蕉翁曰俳諧ふあそふ人ふたつ世間をいづく  
俳諧ふあそふ人のや風雅をいづく俳諧了

あそふ人のやあそぶ志うく無心所着ふあそ  
ふ人々もや也

蕉翁の巻一卷のうへみらみつとも見え侍る  
無心所着よあそぶあそぶ句あり風雅う  
あそぶ句あり世間をみくわくわくのうわ  
らう句あり故ふ巻うらうく見え侍る

一俳詞を志うしれも風調をうたうた

一一巻のうら詩歌りのうたわらうの面影なき

巻ら蕉翁の巻ふた

詩歌物語りの心あそぶあそぶはゆきお  
面影くわく蕉風のうらうらうぬきうたわ  
らうこれ詩歌物語りの面影くわくは  
巻ら巻とせし孤のおさけきり人の医道



志くわの医道志るたる顔少く思俗をま  
るはこころき文育の虚飾家宗匠顔る者  
をゆれ  
る

一蕉翁曰々々きさといつてつてきもすり

鳥獸魚鼈のあそるるみれ々々き也

鳥獸魚鼈のあそるるのみたる人物の  
うき旅ふあそひ山野小ほくきを尋り  
あそひたそそのみを道達の事  
あそくころ巻のうふあそく一巻  
おりころきたる唐人風雅のあそひ  
皇國小それらるるをほめ君子國も唱へ  
る

一戀の句數多くやのふる

蕉翁戀一句あそく捨よる全く無格を  
あそくたそすの詞を見えく却  
巻のうへら戀句の數  
多く見えたる

一俳諧をたゆん人俳諧のうへあそく思

ふらやちこれ聖境ふあそく

故小蝶夢屋士ら俳諧の名たるものや

ひいたまひるる

あそく詩をうたうる風雅  
夫子も手をうた御よるあそく

一樹を植く子の如く又さつる如く子



の如く易く易く易く易く如く易く難く書と讀  
とややく書と忘れたる如く非諧は  
巻成ち及ちややく非諧をわすれく  
うたの体なり

蕉風ふあけくや非諧の巻をわすれく第二三  
義ふ落るるや体なり行ふ余力あり時乃  
文の如く隱逸道心を本躰なりけり  
隱逸道心を不知くたふ非諧の巻をわす  
るのとは是名利の欲

坐忘



